界有数の火山研究所で　A—地質学・火山学　B—地球物理学　C—地熱学・地球化学の3部門がある（第11図）．Aには5研究室があり　Y. M. Abdeiko の海底火山研究室は有名である．　Bには5研究室があり　その一つに P. I. Tokarev の地震火山予知研究室があり　1975－6 の Tolbachik 火山の噴火予知で名をあげた．　Cにも4研究室がある．　研究所は総員538名　内科学者約130名である．

別表をながめるとわかるように　これらの科学研究機関の重要なポストはほとんど地学関係者が占めている．Far East Science Center の director は有名な地質学者 N. A. Shilo であるし　Kamchatka の Inst. Volcanology や Khabarovsk の Inst. Tectonics and Geophysics の director はいうにおよばず　Sakhalin の総合研究所長も地質学者　つい先日まで Shilo が所長をしていた Macadan の総合研究所長も　後任がどうなったか知らないが　地質学者があとをおそったのではなかろうか．　とにかく　この国とくに極東での地学のしめる地位の高さが推定されるところである．

中央と地方

私たちは　ソ連極東の地学関係者とは　とかく　接触がうすい．　ソ連地学者でよく来日したり　国際会議で顔をあわせたりする人は　モスクワ関係が多い．　極東の機関にいても Prof. Shilo とや Prof. Fedotov などよく出てくる人達がいる．　しかし　これらの人たちはそれぞれアカデミー会員とか準会員とかで　極東にいても中央の人なのである．　国際交流に中央の人が活躍するのは　避地問題ではなくて　ソ連がヨーロッパ型の中年社会だからかもしれない．　ソ連では中年や初老が力をもっていて　若者はそのかげにかくれがちである．日本やアメリカの若者が猛烈ないきおいで年寄をおしのけて発言しているところをみたら　ソ連の若者は肝をつぶすだろう．　モスクワがソ連を代表する傾向があるのは　中年以後の実力者がとかく中央に集中しやすいという意味での中央集権の結果かもしれない．

学風にも中央と地方があるようにみえる．　1976年の日ソシンポジウムでは　さすがに極東の地学者が主役だった．　彼等の指導者層は公然といっていた．　"Anti-plate is our slogan"．　plate にのろうものならはじき出されそうであった．　ところが今春　東京で開かれた Geodynamic Project の国際集会にきたソ連中央の人には　海洋底拡大論者がいた．　モスクワでは少数派ではないという．　中央と地方と自由度がちがうのか　国際社会への開かれ方のちがいなのか　また　日ソシンポジウムで寄異に感じたことの一つは　トップクラスをのぞくと　極東の四大研究機関の地学者たちの横のつながりはきわめてわるいらしいことである．　食事やレセプションでも機関毎にかたまっていた．　理由の一つになりそうなのはわかる．　ソ連には単一の〝地質学会〟がない．　極東だけの地方学会もない．　そういう〝横わり〟の機能はモスクワのアカデミーがはたす．　アカデミーはそれぞれのテーマ　プロジェクト毎に委員会を組織する．　だから〝横わり〟の組織があるといっても　本来〝たてわり〟なのである．　研究体制においても　中央集権的というべき国なのであろうか．

～地質調査所の出版物～

・地質調査所月報　第29巻　第4号

Fujii, N., Sudo, S. and Kuriyama, M.: An Outline of Expanded Shale Resources in Japan.

宇野沢昭：福井県小浜平野の第四紀層の ^{14}C 年代と花粉分析結果について

尾崎次男：三重県四日市市における地下水位の観測結果

地質調査所編集委員会：国際単位系（SI）について

岸本文男訳：1975年カムチャッカ半島トルバチーク火山噴火関係論文　（5編）

・地質調査所月報　第29巻　第5号

Yoshii, M.: Geology and Manganese Deposits of the Kunohe Area, North Kitakami Mountains.

東元定雄・佐田公好：山口県東部に分布する玖珂層群中の含紡錘虫石灰岩礫岩について

研究発表会　講演要旨

・地質調査所月報　第29巻　第6号

牧　真一・永田松三：島根県下の新第三系堆積岩中の有機物について

渡辺暉夫・坂本正夫・湯浅真人・片田正人：長野県南部遠山地方　秩父帯の三畳紀緑色岩中のケルスート閃石

寺島　滋：原子吸光法によるマンガンノジュール中の Mn, Fe, Cu, Ni, Co, Pb, Zn, Si, Al, Ca, Mg, Na, K, Ti, Sr の定量

石山尚珍：津軽平野の湖沼群に生息する貝類とその環境について

100万分の1日本地質図編纂委員会：100万分の1日本地質図（第2版）編さんに関する若干の覚え書